



学校法人 福島成蹊学園

福島成蹊高等学校

特別進学コース 令和3年度 福島フィールドワーク

「福島フィールドワーク」を特別進学コースで行いました

2021.10.29 | レポート 高校

10月16日(土)、特別進学コースで「福島フィールドワーク」を行いました。

この行事は「地本・福島について経験的に学び、将来、県外で福島のことを自分の体験として語るができるようにする」ことが目的です。

東日本大震災、原発事故の後、福島県はさまざまな風評にさらされました。それが実際どのような状況にあるのか。また、福島県本来の魅力はどのようなところにあるのか。特別進学コースの生徒は県外に進学する生徒も多いので、福島のスポークスマンの一人となってくれることを願い、この行事が始まりました。これまでに相馬で実際に獲れた魚を焼いて食べたり、原発関連施設を見学したり、さまざまな活動をしてきました。

今年は猪苗代湖畔の約半周19キロを歩きました。学校を出発したときは雨模様で心配されましたが、土湯峠のあたりから天候が変わっていき、猪苗代湖に着いたときは晴天となっていました。

野口英世記念館を出発し、郡山少年湖畔の村まで約19キロ。猪苗代湖の美しい光景に癒されながら、全員が歩き切りました。

郡山少年湖畔の村では飯ごうで炊飯。班ごとに、カレー、炊き込みご飯、中華丼などを作り、疲れた体には最高の昼食となりました。

特別進学コースは部活動を行っていないなく、「勉強漬け」というマイナスイメージを持たれがちです。もちろん、難関大学に合格するには勉強は欠かせません。しかし、それを「漬け」ととらえるかどうかは一人ひとりの意識の問題だと思います。実際、このような行事や探求活動にも力を入れており、仲間、先輩後輩、先生との絆がとても深いことも特別進学コースの特徴です。今回の経験も生徒一人ひとりの今後にさまざまな影響を与えてくれることと思います。



特別進学コース 令和2年度 福島フィールドワーク

特進コース 福島フィールドワーク

2020.09.23 | レポート 高校

特別進学コースでは毎年、この時期に「福島フィールドワーク」を行っています。これは生徒が自分の体験として地元の「福島」を理解し、やがては一人ひとりが福島の良さを伝えることのできるスポークスマンとなることを目的としています。

今年は9月19日(日)に実施。新型コロナウイルス感染症感染拡大にも配慮し、大きな移動や密の状況を避け、学校から福島市荒井にある「四季の里」までの約14kmを歩くプログラムとなりました。

普段、見慣れた場所でも自分の脚で歩くことはめったになく、生徒にとってもさまざまな発見があったようです。天候にも恵まれ、あらためて福島の自然の美しさを感じることができました。

心地よい疲労の後の昼食は、四季の里の農園レストランで、なんと、ジンギスカン・しゃぶしゃぶの食べ放題、飲み放題！貸し切りにしていただいたので、他のお客様に迷惑をかけることもなく食事ができました。感染症防止のため、会話が十分にできなかったことは残念でしたが、この年代の高校生にとって「肉の食べ放題」以上に望んでいることはなかったようです。レストランの採算が心配される食べっぷりでした。

「福島フィールドワーク」は県内のさまざまな施設での研修や、登山など福島が誇る自然を味わうのが趣旨です。来年は本来のスタイルでの実施ができることを願います。



特別進学コース 令和元年度 福島フィールドワーク

福島フィールドワーク 一人ひとりが福島のスポークスマンに

2019.10.01 | レポート **高校**

9月21日(土)、福島フィールドワークを行いました。

これは特別進学コースの行事で、

○福島の自然や農作物について体験的に学び、将来、県外に出た際に福島のことを自らの体験を通して語れるようになる。

○風評被害などに対して福島の復興を担う人材となれるように、震災・原発事故について学び、正しい情報・知識を身につける。

・・・ことを目的としています。特進コースの生徒は、高校卒業後には福島から離れる者も少なくありませんが、そうであっても、福島のことを正しく伝えられるように、そして、直接、間接の違いはあっても、福島に貢献できる人材として成長するための取り組みでもあります。

この行事をより有意義なものとするために、2回の事前学習会を行っています。

1回目は9月12日(木)に環境再生プラザアドバイザーの安藤宏先生を講師にお招きし、放射線の基礎について学びました。そもそも放射線とは何なのか、8年前に飛び交った「シーベルト」「ベクレル」ですが、これらはどんな意味があり、どう違うのか。現実的にどのくらいの数値なら問題があり、どのくらいなら気にしなくてもよいのか、などを科学的に分かりやすく解説していただきました。また、その場で放射線（正しくは放射線が飛んだ跡）が見える実験も演示してくださいました。アルコールを用い、飛行機雲の原理で見えるようにしているとのことでした。（下に動画があります）

2回目は9月14日(土)に相馬双葉漁業協同組合青壮年部の高橋 一泰先生、福島県水産事務所漁業振興課の伊藤貴之先生を講師に相馬の漁業の現状について学びました。震災後の試験操業から現在までの様子や、福島県の魚介の安全性を訴える県外でのPR活動のこと、また、検査の仕組みや、結果の安全性（国よりも2倍厳しい基準で検査を行い、問題がないとのことでした）などのお話がありました。

そして、当日、午前「東京電力廃炉資料館」「特定廃棄物埋立情報館『リプルンふくしま』」を訪れました。どちらも双葉郡富岡町にある施設ですが、「廃炉資料館」は原発事故の状況や廃炉の現状などが展示されており、生徒たちも神妙な面持ちで見学していました。原発内での作業で使用しているマスクを着用するコーナーもありました。「リプルンふくしま」は、放射性物質に汚染されたごみの埋立処分についてわかりやすく学べる体験型の情報館です。特定廃棄物の埋立処分事業の概要や必要性、安全対策、進捗状況などについて「さわり」「遊び」ながら、「知る」ことができます。実際の埋立場の見学も行いました。

午後からは新地町の相馬地域開発記念に移動し、野外炊飯を行いました。2回目の学習会でお世話になった相馬双葉魚業組合さんより相馬沖でとれたカレイを準備していただき、パーベキューです。肉厚の、卵がたっぷりと入ったカレイで、焼き上げるのにかなり苦戦していましたが、何とか完成。「おいしい！」の歓声が上がりました。

【生徒感想】

○施設見学では放射線や廃炉現場の状況などをくわしく学ぶことができました。また、被災地を通行し、被害の大きさを間近に感じることもできました。東日本大震災は私たちに大きな被害をもたらしましたが、地震、津波、原発事故の記憶を風化させずにこの恐ろしさを伝えていきたいと思いました。

○僕は小学1年生まで浪江町に住んでいましたが、バリケードがあつたり営業していない店が並んでいたり草や木が生い茂っていたりと、あの頃とは全然違った町でした。野外調理で福島の魚を焼いて食べましたが、安全を確かめられた魚はとてもおいしかったです。

○今回は自分たちの体験した東日本大震災を改めて学びました。リプロンふくしまや廃炉資料館、雑草で看板が見えなかったり建設事務所になった洋品店などの町並みの景色から震災当時の状況、そして今の状況まで理解を深めることができました。福島現状を、震災の体験をもっと多くの人に知ってもらい、これからの世代にも伝えていきたいと思いました。

